

桶川 (埼玉)

経験豊富なベテラン監督が鍛え上げた走塁と試合後半の集中打が武器。強豪校を撃破し春4強以上の躍進を果たし、地域トップチームの座を狙う。



この日約20キロ離れた熊谷市で39・8度と6月の国内最高気温を叩きだしていた。その影響からか桶川高校のグラウンドもうだるような暑さに襲われていた。

しかし夏の大会が近いこともあり、選手達はそんな暑さに耐え、一球一球集中してボールを追っていた。

「うちはそんなに強いチームではないですよ」と微笑むのはやや小柄で、穏やかな教授のような風貌の大野仁監督。監督として今年で32年目になる。

ただチームは09年秋県8強、今年の春県4強と躍進が目覚ましい。

左右2人の投手が試合を作り、後半に点を取る

そんなチームの特徴は守りでは2人の投手含めバッテリーが安定しており、攻撃では練習試合で一試合平均4〜5個盗塁を決めるなど機動力があること。

武藤投手はコーナーギリギリに投げられる、左腕では珍しいコントロールの良さが特徴。柏投手は右の本格派でこの代のエース格として下級生の頃から投げている。

ただ秋、春の大会ではこのこという試合では武藤投手が好投。春の大会の驚宮戦では打線が相手投手に1得点に抑えられるなか3安打完封。

春の大会では柏投手が万全な状態ではないなかで、「自分がしっかりと投げなければいけない」と思い、捕手のリードを信じ、打たせて取る投球を意識して一球一球しっかりと丁寧に投げた。

結果、監督も「春になって見違えるほど自信を持って良い投球をするようになった」という成長を見せた。

そこには2年生の土井捕手の存在も大きい。我慢強い性格で「普段からリードについて凄く勉強していて、考えて投手の良い所を引き出してくれる。リードは全部任せて信頼して投げている」(武藤投手)

打線は1番を打つ針谷(はりがや)主将、3番畑野選手、4番の原田選手ら力のある左打者が中心だ。針谷選手は春の秀明英光戦であつという間にライト線を抜ける二塁打を放つなど、スイングスピードの速さを活かした強い打球が特徴。走塁面での判断能力の高さも光る。畑野選手はバットを後ろに引く独特のフォームから鋭い打球を放つ好打者。原田選手は打撃能力の高さもさることながら、終盤のチャンスなどこぞという場面で結果を残してきた勝負師だ。

秋・春の公式戦、11試合49得点中約8割の40得点が7回以降と、終盤に点を取る場面が多い。春の昌平戦では1点ビハインドの8回に1挙8点を挙げてコールド勝ちを決めた。

選手達も「秋の大会くらいから終盤に点を取って逆転出来るようになってそれが自信になった。ビハインドを背負っていても、普段通りやれば逆転できる」という雰囲気がある」という。

グラウンドのバックネット裏には小さな監督室がある。その書棚には野球などスポーツの技術本、メン



左上/ノックを打つ大野監督。(情性の練習で)練習をした気にならないこと、終わった時に上手くなったと思える練習をする選手に教えている。

中上/針谷選手。1番を打つチームの主将。センターとしての守備範囲の広さも光る。
右上/左腕の武藤投手。秋・春の大会を経て心身ともにエースと呼べる投手に成長した。
左/本塁突入の練習をする選手達。点を取る上で生命線となるプレーだけに集中して取り組んでいる。

タルトレーニングの本、そして大野監督が好きだという映画『ロッキー』や『フィールド・オブ・ドリームス』のビデオなどスポーツ関連の資料になるものが多く置かれている。「講習会にもよく行くし、勉強が好き」と語る監督は様々な所から知識を貪欲に吸収している。

磨きあげた走塁能力とノリの良さも大きな武器

チームの生命線となるのがベースランニング。その強化のため妥協をすることはない。

三塁に走者がいてゴロの場合には本塁に走らせる。狭殺プレーはタツチする所、捕球した所など何点か(走者が本塁に)突っ込むポイントがあり、練習では選手がどこで突っ込めばいいかわかるくらいまで何度も行う。そして、練習試合などでそういった感覚を研ぎ澄ませていく。

「走者は常にホームを狙う。三塁ベースコーチは止めるだけ。判断は出来るだけシンプルに、選択肢を少なく。決断をする時は選択肢が多いと迷うが少なくと迷わない」(大野監督)

エンドランでも場面、場面を意識し、ゴロを打たなければならぬ時とそうでない時があることを考える。二死一塁のエンドランは外野の間を抜ければ点になるのでゴロでなくても良いから強い打球を打つ。それとは

逆に無死や一死などゴロを打たなければいけない場面もある。

そういうことについてチーム全体で話し合い考えるためのミーティングを、冬場には毎日練習終了後1時間以上行ってきた。

そこで野球とはどういうゲームなのか? ということを選手達が理解し、その上で先の塁を取ることを一生懸命追求する。

そんな姿勢が桶川高校の走塁能力を上げている。

大会でのマネージャーが加わった陣、活気がある練習を見ていてチームの雰囲気の良いが伝わってくる。それは昨年のチームから上手に引き継いでいる部分で練習の時も上級生が率先してグラウンド整備をするなど、大変な仕事は上級生が行っているという。選手達は体育祭の応援合戦などの学校行事では目立つ存在であり、人に見られることを楽しむノリの良さがある。

そういった部分が試合でも発揮される。春の大会では代打での出場が多かったが「ラッキーボーイ」的な存在だったという矢沢選手がチームに勢いを与えた。秀明英光戦では追いつかれた後の8回の先頭打者として登場。相手のエラーを誘い出塁し、その後連打と相手のミスも重なり4得点。
このような選手が活躍し、他の選手もその波に乗れるという面も桶川高校の強みと言える。



上 / 他の部活動と共用のため全面を使って練習が出来る時間は限られており、時間とスペースを有効に使うことが求められている。上級生中心のAチーム、下級生中心のBチームで分かれてノックを行うのもそれに対応した練習のひとつ。全体練習終了後に残ってティーバッティングをしたり、昼休みにグラウンドで素振りをする選手もいるなど1人ひとりが「考えた」練習をしている。

右 / 練習で着ているユニホームには選手達が思い思いの背番号を付ける。球が速くなりたいので藤川（阪神）投手の22番、自分の誕生日を3ケタの番号で付けている選手など様々。桶川高校野球部独自の「遊び心」が感じられる。



試合前の円陣

円陣の中に制服を着た女子マネージャーが加わる。

これは昨年のマネージャー二人がソフトボール部出身で、元気でノリが良い性格だった彼女達が思い立って始めたことだという。

「チームの雰囲気良くなる」と現在の選手達やマネージャーも良い“伝統”として受け継いでいる。

大野監督は「同じ地域では上尾（今春の県大会準優勝校）という強豪校があり、そこを目指してやってきた。以前はその背中は見えなかったが、今は大きくなってきている。ちょっと横顔も見えたかな（笑）上尾を追い越すというのがチームとしての大きな目標。そして春は6勝したので、夏は7勝したい」と語る。

そんな桶川高校の初戦は松山高校との対戦。両者は秋季地区大会2回戦で対戦し、この時は6-5の9回サヨナラゲームで桶川高校が勝利した。針谷主将は「松山は強いチームなので気を引き締めて戦いたい。春のように大会序盤から強いチームに勝って勢いを付けたい」と選手に気負いや慢心は感じられない。

試合は7月12日14時、球場は上尾市民球場となっている。